

〔原著〕

食に関する看護実践に対する患者の認識

—病院の形態別回答者の特徴を中心に—

尾岸恵三子* 寺町 優子* 佐藤 紀子* 久田 満* 野副 美樹* 猪熊 京子**

PATIENTS' PERCEPTION OF NURSING INTERVENTION ABOUT DIET —BASED ON DIFFERENCES IN CHARACTERISTICS OF PATIENTS RELATED TO FUNCTIONS OF HOSPITALS—

Emiko OGISHI* Yuko TERAMACHI* Noriko SATO*
Mitsuru HISATA* Miki NOZOE* Kyoko INOKUMA**

すでに我々は、安楽をもたらす看護実践に対する患者の認識の特徴について報告をしてきた。本研究は、安楽をもたらす看護実践の中から、人間の基本的ニーズの根幹となる「食への援助」を取り上げ、食に関する看護実践に対する患者の認識とそれに関連する諸要素について、特に病院の形態に注目し検討することを目的とした。

回答者は、特定機能病院（4施設）571人、一般病院（4施設）460人の入院患者である。調査は、質問紙によるアンケート調査とし、分析には重回帰分析を用いた。

結果として以下のことが明らかになった。

1. 食に関する看護実践に対する患者の認識は、病院の形態に関連する。
2. 食に関する援助を良くしてくれていると認識している患者は、特定機能病院に比べ一般病院の患者に有意に多く認められた。

病院の形態が看護の質にどのように影響を与えるかさらに検討することが必要である。

キーワード：食生活、安楽、看護実践、特定機能病院

Abstract

The researchers have reported patients' perception of nursing intervention regarding comfort. The purpose of this study is to identify patients' perception of nursing intervention regarding diet and its factors.

The survey questionnaire was distributed to patients admitted to four specialized acute care hospitals (n = 571) and four general hospitals (n = 460). A multiple regression method was used to analyze the data.

The following statements are results.

1. The perception of nursing intervention regarding diet is related to functions of hospital.
2. The perception of nursing intervention regarding diet is significantly higher among patients who admitted to the general hospitals than those who admitted to the specialized acute care hospitals.

It is necessary to investigate how the different functions of hospitals influence quality of nursing care.

Key words : Dietary practice, Comfort, Nursing intervention, Specialized acute care hospitals

* 東京女子医科大学看護学部 (Tokyo Women's Medical University, School of Nursing)

** 東京女子医科大学病院 (Tokyo Women's Medical University Hospital)

I はじめに

すでに我々は、安楽をもたらす看護実践に関する患者の認識について、患者が重要としていることと看護者が実行していると患者が認識していることに関する調査を実施し、その結果、明らかになった特徴について、第1報（東京女子医科大学看護学部紀要第1巻）および第2報（東京女子医科大学看護学部紀要第2巻）において報告した¹⁾²⁾。また、多様化する保健・医療・福祉の社会において、最も患者の近くにおいてその生活を支援し、安楽をもたらす看護の役割は大きく、また重要であることも確認した。

本研究の目的は、安楽をもたらす看護実践の中から、人間の生活の最も重要な側面といえる基本的ニーズの根幹となる「食への援助」を取り上げ、それに関連する諸要素について、特に病院の形態に注目し検討することである。「食への援助」の定義としては、下記のようにとらえた。すなわち、食は、広義には食生活ととらえることができるが、多くは社会的な活動を含めた場合に“食”として用いられている。食が包括する四つの側面として、足立³⁾は食品、調理、栄養、食生活を取り上げ、また、“食生活”を支える主な行動として、食習慣、食行動、食事をあげている。我々の食への援助をする対象は、“食べる人間としての患者”であり、この人間と“食物”の相互の関係の中に援助という関係性を築く活動として食をとらえ、「食への援助」と呼ぶことが適切と考えた。

我々は、このような包括的な意義を含めて食への援助の検討を行った。

II 方法

回答者は、北海道から九州に亘る8病院、ベット数1860床を有する病院から500床の規模の病院に、入院中の1031名の患者である。回答者の選出は、各病院の看護部長・総婦長の協力を得て、病棟毎に婦長、主任を中心にして行われた。また、回答者の条件は、設問に回答できる健康状態であること、入院生活を体験できていること、また、本調査に協力の了解が得られた人であり、無記名とした。

調査は、質問紙によるアンケート調査とし、殆どは手渡し法で行い、それが不可能な一部の回答者には郵送法で、1999年5月から6月に実施した。

調査内容としては、まず「あなたが十分かつ適切な食

事や飲物をとっていることを確認してくれた」、「あなたの食事をできるだけ食欲がわくように工夫してくれた」の2項目についての看護実践に対する患者の認識を尋ねた。回答形式は、これらの項目について看護者が「十分に行っている」と認識している場合を5、「行っていない」と認識している場合を1とする5段階の評定とした。

これらに関連すると思われる変数として、①健康の状態、②在院日数、③家族のサポート、④診療科、⑤病院の形態の5項目を取りあげた。健康の状態は、「どんなことでも自由に行動できる」を5として、「完全に身の回りのことができず、1日中寝ているか、椅子に座っている」を1とする5段階評定とし、また、家族のサポートは、「とても良くしてくれる」が5、「ほとんどない」を1とする5段階評定である。

以上に加えて、患者の属性（性、年齢、婚姻状況、職業の有無）に関するデータを収集した。

分析は、重回帰分析を用いた。基準変数は、「食への援助」に関する上記2項目である。健康の状態、在院日数、家族のサポート、診療科、病院の形態の5項目を説明変数とした。診療科は、外科と内科に分けた。病院の形態については、特定機能病院と一般病院の2グループとした。また、性、年齢、婚姻の状況、職業の有無の4項目は、コントロール変数として重回帰分析に投入した。

なお、分析には、統計解析ソフトSPSSを使用した。

III 結果

1. 回答者の特性

回答者の特性については、特定機能病院（4施設）571名（55.4%）と一般病院（4施設）460名（44.6%）の2グループに分けて表1に示した。

一般病院と特定機能病院における回答者の性別を見ると、一般病院においては男性54.3%、女性42.3%に比べ特定機能病院では男性47.1%、女性50.5%と逆転していた。

また、平均在院日数は、一般病院の33.3（±44.2）日に比較し機能別病院は50.4（±56.3）日で、特定機能病院に在院日数の長い回答者が多く見られた。健康の状態と家族のサポートに関しては、両病院の形態にかかわらずほぼ同じような特性を示していた。

2. 基準変数を「適切な食事や飲物をとっている事を確認」とした場合の重回帰分析の結果

表1 回答者の特性

	特定機能病院 N=571	一般病院 N=460
性別		
男性	47.1%	54.3%
女性	50.5%	42.2%
不明	2.4%	3.5%
年齢		
平均年齢	51.3 (±15.8) 歳	54.9 (±14.8) 歳
職業		
職業有り	47.3%	53.7%
職業無し	49.2%	40.2%
その他	3.5%	6.1%
婚姻状況		
未婚	17.2%	10.0%
既婚	65.3%	63.7%
不明	17.5%	21.3%
健康の状態 ¹⁾	3.7 (±1.1) 点	3.7 (±1.1) 点
平均在院日数	50.4 (±56.3) 日	33.3 (±44.2) 日
家族のサポート ²⁾	4.7 (±0.7) 点	4.6 (±0.7) 点
診療科		
外科	23.6%	29.3%
内科	31.4%	36.4%
その他	45.0%	34.3%

¹⁾ 得点が高いほど健康状態がよいことを示す。

²⁾ 得点が高いほど家族のサポートがよいことを示す。

表2 適切な食事や飲物をとっている事を確認
重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (r)
性別	-.082	-.078*
年齢	.006	.088*
職業の有無	.049	.047
婚姻状況	.031	.026
健康の状態	.005	.016
在院日数	-.064	-.085*
家族のサポート	.123***	.122*
診療科	-.093*	-.095*
病院の形態	.118**	.131**
重相関係数 (R)	.235	

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

この結果は、表2に示した。有意な関連が見られたのは、「家族のサポート」と「診療科」および「病院の形態」である。すなわち、看護婦が適切な食事や飲物をとっている事を良く確認してくれると回答した患者ほど家族のサポートがあると回答していることになる。また、診療科との関連は負であることから、適切な食事や飲物をとっている事をよく確認してくれたと回答している人は外

科の患者に多かった。病院の形態別では、看護婦が適切な食事や飲物をとっている事を良く確認してくれたと回答した患者は一般病院的患者に多く見られた。

3. 基準変数を「食欲がわくように工夫」とした場合の重回帰分析の結果

この結果は、表3に示した。有意な関連が見られたの

表3 食欲がわくように工夫
重回帰分析の結果

	標準偏回帰係数 (β)	相関係数 (r)
性別	.020	.019
年齢	.136**	.159***
職業の有無	.023	.033
婚姻状況	.006	.106*
健康の状態	.031	.028
在院日数	.069	.068
家族のサポート	.061	.079*
診療科	-.020	-.020
病院の形態	.165***	.166***
重相関係数 (R)	.240	

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

表4 病院の形態別にみた基準変数の比較

	特定機能病院		一般病院		t 値
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
・適切な食事や飲物をとっている事を確認	4.14	0.86	4.32	0.75	3.49***
・食欲がわくように工夫	3.22	1.12	3.55	0.99	4.85***

***p<0.001

は、年齢と病院の形態である。「食欲がわくように工夫」してくれたと回答した人は、高齢の患者に多かった。また、病院の形態別との関連では、「食欲がわくように工夫」を良くしてくれたと回答している患者は一般病院の患者に多く認められた。

4. 病院の形態別にみた基準変数の比較

表4には、病院の形態別にみた基準変数の平均値を示した。これらの結果から、両基準変数共に、特定機能病院と一般病院との間に有意差が認められた。すなわち、一般病院の患者に、看護婦が良くしてくれているとみている人が多いと言うことである。

IV 考察

本研究において取り上げた、食の援助に関する「適切な食事や飲物をとっている事を確認」と「食欲がわくように工夫」の2つの項目は、食において重要な意味を持つ項目である。

ナイチンゲールは⁴⁾、その著書『看護の覚え書き』において、食に関わる内容を、食物 (what food) と食事 (taking food) の二つの側面からとらえている。それは①患者が何をどのくらい食べたらいいかの食べる内容と、②患者が食物を摂取するに当たり、何をどのように整えたらよいかという方法についての2側面からである。また、患者の最も適したときに、適した方法で援助することの重要性と患者自身の自立を促すことの必要性について述べている。さらに「患者に何を食べさせるかを決める立場にある人の仕事とは、患者の胃の意見に耳を傾けることであり、『食品分析表』を読むことではない」とも述べている。化学により知らされるのは食品に含まれる成分であるが、患者にとって何が必要であるのかを決めるのは患者の胃であり、それを決定できるのは看護婦の注意深い観察であるとも述べている。今回取り上げた、食に関する2つの項目は、まず患者の胃の意見に耳を

傾けること、すなわち、注意深い観察をすることであり、その意見に添うように患者の自立性に助けられながら工夫する看護婦の行動への患者の認識を問い掛けており、“食”の重要な側面への評価と言える。

この2つの項目は、最高点が5であり、前者の平均得点は、4.14 (±0.86)、後者は3.22 (±1.12) で、“食”の観察への看護婦の実践は良いように思われる。しかし、実際に“食”の工夫への行動は、やや低い得点となり行動化することの難しさを示していると考えられる。なお、「食欲がわくように工夫」において、高齢者に工夫しているとする回答者が多く見られたことは、今後の実践に活用できると考える。

また、2つの項目のいずれにおいても、一般病院の方が得点が有意に高いことは、今後の高度医療下における看護の方向に対する一つの示唆と受け取ることが可能である。

周知のように、特定機能病院とは、現在の大学病院の本院と、がんセンターなどの国の基幹的センター病院を想定しており、高度の医療の提供と、その開発・評価、ならびに高度の医療の研修を可能とする病院である⁵⁾。本研究の結果、この特定機能病院に入院中の患者は、他の諸要因をコントロールした上でも、一般病院の患者に比べて看護婦からの食に関する援助が少ないと認識していることが明らかになった。

その理由として考えられることは、一つに特定機能病院では特殊な高度医療を必要とする患者および重症患者が多く、患者の病態観察や治療面に看護内容が偏り、Cure 中心の看護にならざるを得ない状況であることが予測される。二つには、特定機能病院および一般病院のいずれにおいても看護職員の配置が患者2人に対し1人であったことを考慮する必要がある。すなわち、特定機能病院における看護職員の配置は、その医療の特殊性において、一般病院に比べて重点配置を必要とし、看護 Care の格差がより生じやすい状態にあるとも考えられる。したがって、特定機能病院は、食への援助がより行

われ難い状況にあったとも言える。

本研究では、生活の一側面としての食への援助を中心に検討したが、これらから推測すると患者のあらゆる生活への援助を高めるためには、奥村⁶⁾、二木等⁷⁾⁸⁾の看護婦配置を患者1人に1人をめざすという主張も重要な提案と受け取ることが出来る。

今後さらに病院の形態が看護の質にどのような影響を及ぼすかについて検討することが必要であろう。また、食への援助以外の看護に関しても検討を加え、患者の生活の質の向上に寄与する看護の在り方について考えていきたい。

V 結 論

本研究は、安楽をもたらす看護実践の中から、人間の基本的ニーズの根幹となる「食への援助」を取り上げ、食に関する看護実践に対する患者の認識とそれに関連する諸要素について、特に病院の形態に注目し検討することを目的とした。

回答者は、特定機能病院(4施設)571人、一般病院(4施設)460人の入院患者である。調査は、質問紙によるアンケート調査とし、分析には重回帰分析を用いた。

結果として以下のことが明らかになった。

1. 食に関する看護実践に対する患者の認識は、病院の形態に関連する。
2. 食に関する援助を良くしてくれていると認識している患者は、特定機能病院に比べ一般病院の患者に有意に多く認められた。

高度医療化へと発展する保健・医療・福祉の社会において病院の形態は一層複雑になることが予測される。今後さらにこれらの病院の形態が看護の質にどのような影

響を及ぼすかについて検討することが必要であろう。また、食への援助以外の看護に関しても検討を加え、患者の生活の質の向上に寄与する看護の在り方について考えていく必要がある。

VI 謝 辞

本研究に当たり、調査にご協力頂きました患者、各施設の看護部長・総婦長、スタッフの皆様から感謝申し上げます。

尚、本研究は、平成10年度文部省科学研究費の助成を受けて実施した。

引用文献

- 1) 尾岸恵三子、寺町優子、佐藤紀子他：安楽をもたらす看護実践に対する患者の認識一日米比較、第1報、東京女子医科大学看護学部紀要、第1巻、46-56,1998.
- 2) 尾岸恵三子、寺町優子、佐藤紀子他：安楽をもたらす看護実践に対する患者の認識、第2報、東京女子医科大学看護学部紀要、第2巻、15-21, 1999.
- 3) 足立己幸：食生活論、医歯薬出版、163-167, 1997
- 4) フローレンス・ナイチンゲール著、湯模ます他訳：看護覚え書き、現代社、120-130, 1989
- 5) 二木 立：医療・看護への影響と将来予測、看護管理、10巻、365-367, 2000.
- 6) 奥村元子：看護婦の需給状況と人員配置、看護管理、10巻、360-363, 2000.
- 7) 二木 立：医療・看護への影響と将来予測、看護管理、10巻、368-370, 2000.
- 8) 荒井蝶子：看護管理医療のしくみを知る、日本看護協会、132-133, 1994.